

(国際会議報告)

## 第10回国際ダニ学会議に参加して

和歌山県農林水産総合技術センター 果樹園芸試験場 紀北分場 <sup>もり</sup>森 <sup>した</sup>下 <sup>まさ</sup>正 <sup>ひこ</sup>彦

1998年7月5～10日にオーストラリアのキャンベラで行われた標記の会議に出席した。日本ではこれから夏というのに、冬用のスーツとコートを持参して出発した。キャンベラは海からかなり離れているので、大陸的な厳しい寒さを想像していたが、気候は日本の太平洋側の12～1月と同じで、暖かい日もあれば雨も降った。会場となったオーストラリア国立大学の構内は広く静かなたずまいで、冬にもかかわらず原色のインコやオウムが飛び回るのを見ると、異国に来た感が深まる。夜には有袋類のポッサムが木を登り下りする。

ここはオーストラリアでは唯一の国立大学で、他は州立であるらしい。大会の参加者は約230名、一般講演が2～4会場で24のセッションに分かれて190課題、ポスターは71課題が発表された。各セッションの項目は表-1のとおりである。日本からの出席者は、前回のオハイオ州(アメリカ)では8名であったが、今回はオーストラリア大陸に惹かれたのか、倍増して18名となった。

講演内容はダニに関係する広い分野にわたり、おおまかには農業、土壌、医学関係に分かれている。私は農業関係の講演をおもに聞いたが、ハダニ類よりもカブリダニなど天敵類の発表が多いのが目についた。某氏によると、環境問題に絡めて天敵のほうが予算が取りやすく、そのような課題が増えているのではないかということであった。ハダニに関する生態関係の一通りの仕事は一段落したともとれる。ただし、DNA解析や分子遺伝学の分野はまだこれからで、茨城大の後藤先生の発表では、ナミハダニの黄緑型と赤色型を半自然状態におき、PGIアロザイムを遺伝的マーカーとして見ると雑種個体の適応度は著しく低く、子孫を残せないことがわかり、別種として扱われてよい根拠が示された。しかし、この問題には種々の思惑があり議論は今後も続きそうである。私自身、ハダニの寄主間移動に興味を持っており、アロザイムの利用やDNA分子遺伝学の進歩によって、圃場と雑草間の移動や遺伝子交流の実態がより具体的にわかる

ことが期待される。

オランダでは現在天敵利用が進み、複数の害虫に対して複数の天敵を放飼している。このような状況を反映して、従来、害虫と捕食者の1対1の関係が研究されてきたが、オランダのSABELISらのグループはさらに進めて、ハウス栽培の栽培植物-害虫(ハダニ、アザミウマ)-天敵(ハナカメムシ、カブリダニ)をめぐる3種以上の関係で捉えようとし(講演者はfood webという表現を用いた)、以下のようなことがわかってきた。①ハナカメムシを放飼する場合、ハダニとアザミウマのどちらを好むかという問題があり、ハダニとアザミウマ間には資源(栽培植物)をめぐる競争が生じる。②ミカンキロアザミウマの幼虫は通常ハダニの巣網のないところを好むが、捕食者の存在を示す揮発性物質が放出されると網のあるところに移る行動を示し、そこでハダニの卵を捕食する。③花粉はデジェネランスカブリダニとミカンキロアザミウマの両方の餌であるが、人為的に花粉量を

表-1

- Dipersal in the Acari
- Interactions between mites and plants
- Ticks and immunology
- Mites and human welfare
- Mite-plant interactions and host resistance
- Acarine systematics and biogeography
- Evolutionary ecology of reproduction
- Chemical control of plant mites
- Hormonal regulation of reproduction and development
- Patterns of evolution and diversity in the Acari
- Acarine biological control agents
- Genetic markers and mite population biology
- Ecology and phylogeny of ticks
- Ecology and biology of soil mites
- Parasite/host physiology interaction
- Classical biological control-pros and cons
- Mites of stored products and bees
- Mite life history and behaviour
- Control of ticks
- Mites as bioindicators
- Food webs of mites on plants
- Phylogeny and ecology of ticks and related mites
- Advanced in horticultural acarology
- Acarine morphology and ultrastructure

A Report on '10th International Congress of Acarology' at Canberra, Australia. by Masahiko MORISHITA

(キーワード: 国際会議報告, ダニ, オーストラリア)



ポスター会場

増やすとカブリダニがよく増殖しアザミウマの密度を抑えた。

本会議は、日本ダニ学会と同様に農業関係のダニだけでなく、ダニ全体の進化や分類に関する発表も聴けることが大きな特徴といえる。また、話題がダニに限られ、参加者が旧知の関係にあるためか、会場の雰囲気は非常にリラックスした印象を受けた。他の学会はよく知らないが、会議前夜は Welcome reception, 1日目は講演終了後オーストラリアの本の紹介, 2日目夕方はサンドイ

ッチを食べながらのポスターセッション, 3日目はダニの同定方法についての講演と, 1日講演を聴いた後に夕方からまた何か行事があり, 学会漬けのような毎日であった。

国際会議への参加は二度目で前回はポスター発表であったので, 今回思い切って一般講演を行った。発表よりも質問のほうを心配したが, 私の英語力を察してか (または乏しい内容のためか), 質問もなく終わった (ほっとしたと同時に少し残念)。しかし, ポスター会場では非英語圏 (アジア, ラテンアメリカ系) の人と少し話げできた。国際会議は言葉と旅費の捻出が大きな問題であるが, やはり, 海外での研究動向を肌で感じることができるのは得がたい収穫と思う。

会期後半の1日を某氏らと市内観光に当てた。首都なので国会議事堂が観光地になっている。高い塔に登ると, 市街地の向こうには林と原野が広がり大陸の奥につながっていた。

なお, 今年5月には京都大学で「植物ダニ個体群動態国際シンポジウム」が開催される。農業ダニに興味のある人は参加してみてもはどうだろうか。

## ●月刊誌「植物防疫」特別増刊号

発行 日本植物防疫協会

### No. 2 天敵微生物の研究手法

岡田齊夫 編者代表 B5判 222 ページ  
定価 3,058 円(本体 2,913 円+税) 送料 140 円

天敵微生物を研究するための一通りの方法 (研究施設, 天敵微生物の探索・同定・増殖等) のほかに, 近年進歩が著しい遺伝子解析実験法と天敵微生物の目録を付す。

### No. 3 鳥獣害とその対策

中村和雄 編 B5判 190 ページ  
定価 2,549 円(本体 2,428 円+税) 送料 132 円

我が国の農作物に被害を与えている主要な鳥獣について, その分布や生態と被害防止法を詳細にまとめたもので, 本邦初の鳥獣害対策の専門書と言えよう。

### No. 4 植物病原菌の薬剤感受性 検定マニュアル

日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会 編  
B5判 172 ページ  
定価 2,800 円(本体 2,667 円+税) 送料 124 円

作物病害の防除を主として殺菌剤に頼らざるを得ない現実の中で, 耐性菌の問題は避けて通れない。本書は, 薬剤の試験や現場対応に関係する方々にとって有益な書である。

### No. 5 日本産植物細菌病の病名と 病原細菌の学名

西山幸司 著 B5判 227 ページ  
定価 3,200 円(本体 3,048 円+税) 送料 132 円

植物細菌病の診断ならびに病原細菌の分離・同定に関係する方のために, 我が国に発生する細菌病の種類, 発生生態, 病原細菌の生理生態的特徴を取りまとめた。

お申し込みは, 直接本会出版情報グループに申し込むか, お近くの書店でお取り寄せ下さい。

(社)日本植物防疫協会 〒170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11 Tel(03)3944-1561 Fax(03)3944-2103